

ふっこう
復興への第一歩

震災後、仙台市内に仮設住宅が建てられました。そこから通う友達もいました。仮設住宅に住む人たちは、どんな思いや願いをもって生活をしてきたのでしょうか。また、仙台市は復興に向けてどんなことに取り組んできたのでしょうか。

1 震災がれきの処理

震災で出た大量のがれきをどうやって処理するかが被災地で問題となりました。仙台市で出た震災がれきの量は約135万トンで、それは通常に処理するごみの量の約4年分です。仙台市は、沿岸部にがれき置き場と焼却炉を建設して処理を進め、3年かかって2014（平成26）年に処理を完了しました。

また、がれきの放射線量や焼却炉からの大気汚染などに細心の注意をはらい、できるだけ分別をしてリサイクル推進にも力を入れました。



沿岸部の震災がれき置き場

2 住まいの確保と移転

仙台市は、震災によって住宅を失ったり住むことができなくなったりした人たちのために、公園や学校予定地など、市内19か所にプレハブの応急仮設住宅を建設しました。そのほか、公営住宅や民間の賃貸住宅を借り上げた応急仮設住宅に住んでいる人たちもいました。

仮設住宅の一つ、仙台市若林区伊在字東通にあるプレハブ仮設住宅には、津波が押し寄せた荒浜地区の方々など、一番多い時期で約190世帯が居住していました。住民のみなさんは交流を深め、互いに

助け合って生活をしてきました。さらには、若林区役所の職員が集会所に交代で勤務してサポートしてきました。

仮設住宅にお住まいの方が、復興の願いを込めて作った「復興かえるストラップ」は、かつて貞山堀で採れたしじみ貝に布を貼って作った商品の一つです。

願いを込めた
「復興かえるストラップ」

3 震災直後の被災者の思い

仙台市が行った「住まいについてのアンケート調査」（平成23年津波により被害を受けた地域の住民対象）の結果によると、「別の場所に移動したい」「元の場所で生活したい」など、被害を受けた場所や状況、職業のちがいによって人々の考えは様々でした。

震災で大きな被害を受けた沿岸地域では、仮設住宅や別の場所に移った住民の皆さんが、自分たちの住まいや地域のこれからについて、勉強会や話し合いを重ねながら考えてきました。

未来を担う子供たちへ

公益財団法人近野教育振興会
理事長 近野 兼史さん



近野さんは、子供たちが読書の面白さを知り、たくましく成長してほしいという願いを込めて、震災後、仙台市立の全ての学校に多くの本をおくりました。この副読本もそんな近野さんの思いに支えられ、みなさんにとどいています。

多くの本を寄贈して下さった
近野さん